

制を讚美したと伝えられているが、それも公会堂に集まって討議するというような慣習を受けていたためであろう。⁽³¹⁾このようにシヤカ族の雰囲気は全体として、自由主義的であり、当時としては進歩的改革的であった。このような精神的雰囲気の中から仏教が出現したのである。

シヤカ族はヒマラーヤ山の麓、ネパールに住んでいて、昔からコーサラ国王に従属した状態⁽³²⁾にあった。修行中の釈尊のことばとして古い詩句にも、

『雪山（ヒマラーヤ）の中腹に正直なひとつの民族がいます。

昔からコーサラ国の住民であり、富と勇気を持っています』(S. 422)

⁽³⁴⁾という。おそらくコーサラ国（ほぼ今日のアウド〈Oudh〉）に従属し、朝貢していたのであろう。当時新興国としてのコーサラはアヨーディヤーやカーシー（llベナレス）をも支配し、サーキヤ国（シヤカ族）のようなくつかの弱小国を隷属させていたのである。

この関係はゴータマ・ブツダの晩年においても続いていたらしい。かれ自身のことばとして次のようにいう。

『シヤカ族はコーサラ国のパセーナデイ王に従属している。シヤカ族はかれに対して従順であり、敬礼をなし、席を立ててあいさつし、合掌をなし、謙遜な態度をとる。それと同様にコーサラ国のパセーナデイ王は如来に対して従順であり、敬礼をなし、謙遜な態度をとる。——王はいう、

「修行者ゴータマは生まれがよい（sujata）ではないか。わたしは生まれが悪く（dujjata）。修行者ゴータマは力が強く、わたしは力が弱い。かれは容貌端麗であり、わたしは醜い。かれは大勢力

を有し、われは勢力が少な」と』(DN. XXVII, 8. vol. III, pp. 83-84)⁽³⁵⁾

はたして大王が、実際にこのような謙虚なことばを発したかどうかは疑問である。この文から見ると、シヤカ族のブツダの生まれのよいことをコーサラ王も認めていたのであるが、現実の問題としてシヤカ族よりもコーサラ国のほうが有力となっていた。しかし宗教者・釈尊を尊敬していたことは確かである。だからコーサラ国王パセーナデイはブツダに面会するためには、車を馱ってシヤカ族の都市（Nagaraka など）を通過して進んで行ったのである。

シヤカ族はコーサラ国の支配下にあったが、コーサラ本国の住民とは実質的には異なった民族であったのかもしれない。のちにシヤカ族は巨大なコーサラ国のために滅ぼされてしまうという悲しい運命が待ち受けていたのである。

シヤカ族は東隣のコーリヤ族と密接な関係があった。ともに同類で同じ種族の分かれたものであると考えられている。コーリヤ族も小さな国を形成していた。シヤカ族の首都がカピラ城であったのに対して、コーリヤ族の首都はデーヴァダハ（Devadaha）城であった。これはネパールのデイヴィダマル（Dividamar）の付近にあり、近年その位置が発掘によって確認されたという。両種族相互のあいだには昔から婚姻がさかに行なわれたらしい。ときには両者のあいだで水争いなども起こったけれども、通常は友好的な睦まじい関係にあったらしい。この両種族を含めてサーキヤ国と呼ぶことさえもあった。だいたい今日のタライ盆地のあたりで、東西約八十キロ、南北約六十キロほどの狭い地域であったらしい。